

生ごみリサイクル

元気野菜作り



今年初めて、笠田高校と三豊市が共同で実施した『生ごみリサイクル 元気野菜作り』。

今回の実験結果で、「生ごみを混ぜた土壌で育てた野菜」は「何も手を加えてない土壌で化学肥料を使って育てた野菜」に比べて、味が濃く、歯ごたえがしっかりしていて、その上、生命力が強いことが判りました。

「温故知新」

昔の人たちの野菜作りに、「ごみの減量化・資源化のヒントがありました。循環型社会に向けて、」1歩「前進しました。」

生ごみを活かせ!!

10月から始まった新しいごみの分別収集。ごみの減量化・資源化は一人ひとりの心がけひとつで、大きく前進していきます。

今回、市ではごみの資源化に着目して、「生ごみ」を有効利用した野菜づくりに挑戦しました。

NPO法人「大地といのちの会」が推進する「生ごみリサイクルによる野菜作り」を、笠田高校と共同で実施。

「生ごみ」を利用して土作りをした土壌において、無農薬・無化学肥料で野菜を栽培・収穫し、通常栽培との違いや生ごみのたい肥としての有効性を検証しました。



まずは土づくり

実験は、笠田高校中央農場の140㎡の畑で実施しました。

実験用の生ごみは、高瀬町農産物利用促進センターの協力のもと、学校給食の調理くずを中心に使いました。

6月25日、第1回目の生ごみ散布が行われました。散布後、耕うんして刈り草を敷き詰め、ブルーシートで覆いました。これは、生ごみを分解し

てくれる微生物の成長を促進するために、適度な湿度が必要なためです。3日程度で、発熱した土壌



に白いカビが発生しました。1週間後、再度耕うん。以降、この一連の作業は7月22日まで行われ、約1カ月で「生ごみを混ぜた土壌」が完成しました。

いよいよ種まき

9月4日、いよいよ種まきです。「生ごみを混ぜた土壌」と「何も手を加えていない土壌」に、それぞれダイコンの種をまいたり、ハクサイの苗を植えたりしました。

種まきをしたあと、「生ごみを混ぜた土壌」には微生物の活動を活性化さす力キ殻有機石灰を散布しました。以降、定期的な水やりと草抜きをしました。一方、「何も手を加えていない土壌」では、苦土石灰のほかに、薬剤等を散布しました。



そして収穫

11月26日、待ちに待った収穫です。ダイコンもハクサイも、生育が若干遅かったものの、たいへん大きくりっぱに育ちました。



収穫後、実験を担当した生徒と市職員とで、両方のダイコンを食べ比べて検証。試食の結果、「生ごみを混ぜた土壌で栽培したダイコンの方が甘みが強く、また、歯ごたえもしっかりしている」という意見が多数をしめました。

また、1カ月前に収穫して常温で保存していた比較実験では、圧倒的に「生ごみを混ぜた土壌」で収穫された方がもとの形をとどめていました。

「何も手を加えていない土壌」のハクサイ



「生ごみを混ぜた土壌」のハクサイ



先の写真のとおり「何も手を加えていない土壌」で化学肥料などを使って栽培したハクサイは、完全に液状化しています。

それに対して「生ごみを混ぜた土壌」で栽培した方は、1カ月も経っているのに、まだまだみずみずしささえ残っていました。

実験結果は

今回の実験の結果は、「生ごみを混ぜた土壌で育てた野菜」は「何も手を加えてない土壌で化学肥料を使って育てた野菜」に比べて、味が濃く、歯ごたえがしっかりしていて、その上、生命力が強いことが判りました。

現在、今回収穫したダイコンとハクサイは成分分析に出されています。その結果を検証した上で、次は3月ごろから実験を開始します。

『生ごみリサイクル元気野菜作り』は、今回、畑で実験しましたが、プランターなどを使って家庭でもできます。

まだ成分分析結果が出ていませんが、生命力の強さは実証されたと思います。当然、農薬などは一切使っていませんので、体にいいことは間違いありません。

「生ごみ」を使つての家庭菜園。皆さんも、まずは家族のために1歩踏み出してみませんか。

実験を終えて



笠田高校3年生
大西健太郎さん

「生ごみを混ぜた土壌」の方には、微生物を活性化さす有機石灰しかやっていなかったの、害虫などの被害もあつて心配しましたが、りっぱに育つてよかつた。真夏の暑い中での、水やりや土づくりの耕うんなどたいへんでしたが結果が出てほつとしてほつている。



笠田高校
川崎博功 講師

一定の成果は得られたと思う。来年は、植える時期をずらしたり、EMぼかしを使つたり、また、家庭用のプランターでも実験し実用化につなげたい。

問い合わせ
農林水産課

62・1128

